

スペイン大学調査報告（サラマンカ大学言語学部現代語学科東アジア文科、ナバラ州立大学国際関係課、他）

2008年3月11日～19日のあいだ下記のスペイン国内の大学等において調査をおこなった。以下はその報告。

なお、マドリード自治大学における日本語教育については、本学の「多言語社会に対応する言語教育学研究者養成」プログラムにすでに詳細な報告があるので、そちらを参照されたい。（http://www.tufs.ac.jp/common/pg/gengo_yousei/jp/8700j.html）

日程：

3月12日：サラマンカ大学言語学部現代語学科東アジア研究科の授業参観・学生へのインタビュー、同科責任者・日西文化センター主任・山田睦男客員教授*、西原潤教員へのインタビュー

（*山田教授はラテンアメリカ史がご専門で、東京外国語大学での非常勤講師の経験もある。）

3月14日：ナバラ州立大学社会学部イオスネ・ゴニ教授へのインタビュー、同大学国際関係課主任スサンナ・ヒント氏へのインタビュー、および同大学に留学中の山口県立大学の日本人学生へのインタビュー

（3月15日～18日は日本における被差別部落との類似性が従来から指摘されているバスク地方の被差別民・アゴテ（Agotes）についての調査をおこなった（ナバラ州ボサテ村サビエル・サンチョトナ博物館、同村およびアリツカン村でのフィールドワーク）。これらは別途の報告に譲るが、「教養日本力」関連授業において反映する予定。）

I サラマンカ大学

① 大学概要

カスティーリャ・イ・レオン自治州立サラマンカ大学はマドリード北東の都市サラマンカに位置する。スペイン最古の大学で、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ボローニャ大学などとならぶ歴史をもつ。学生総数 32000 人。

② 学科概要・日本専攻

言語学部（Facultad de Filología）現代語学科東アジア研究科のなかに日本関係科目がある。ここではスペイン文部省の規定により「東アジア研究科」というコースとなっているが、必修外国語は日本語のみ（修了必要単位 150 単位のうち 24 単位を占める）。語学以外の科目も日本関係の科目が多い。ただしカリキュラムは大学の 3、4 年課程だけを対象とし

て科目が構成されている。

ちなみに日本関係教科は以下のとおり。

〈基礎〉「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」「日本語Ⅴ」「日本語：古典と前近代」「日本の哲学、宗教と文化」「日本文学Ⅱ：近代と現代」「日本思想史」(×2)「近現代日本文化史」、〈必修〉「日本語翻訳Ⅰ」「日本語翻訳Ⅱ」「日本美学・文学史」、〈選択〉「日本思想史における神道」「日本経済」「日本語史」(以上、それぞれ各 6 単位)。

同研究科は言語研究を志向する学部にも所属しているが、実際には東アジアに関する学際的で地域研究的な科目構成をもっている。そのため文学部的な科目、社会科学、歴史関連の科目をもつ。

また、日本語を含む全科目は、エラスムス計画 (EU 加盟国間の学生交流支援) による外国人学生を含む、学部内外の学生が選択できる。

③ 該当学科の学生の様態について

東アジア研究科の学生数は現在 8 人 (コース外からの受講生の総数は不明)。彼ら・彼女らに要求される水準は、日本語能力検定試験 2 級程度の日本語力と簡単な日常会話と読解力。ただし 4 年課程を終えても全員がその水準に到達できるわけではない。

日本語を専攻した理由としては、幼少期から漫画、アニメなどで日本に好意をもち、親近感や好奇心を持った、日本語が難しいと聞いて挑戦したいと考えた、遠い異国なのでその文化に関心を持った、また、日本の大衆文化に関心がある、など。

④ 日本関係のテキスト、情報とのアクセスについて

基礎日本語のテキストは『みんなの日本語』。ただし英語話者を対象にした教材が多いことに多少不満があるようであった。

日本に関する和書はサラマンカ大学日西文化センター図書館に 4 千冊 (未整理図書もふくめると 5 千冊ともされる) の寄贈図書がある。これはサラマンカ大学への留学経験者などによって構成されている「サラマンカ友の会」の寄与によるところが大。岩波書店や小学館など大手出版社の各種全集など新刊書も多く、文学・文化関係のバランスもよい。スペイン国内では屈指の充実ぶりである。ただし初期の図書館形成の過程で文学重視の方針がとられていたため、社会科学関連の蔵書はまだ不十分であるとのことである。

また、和書のスペイン語訳書が必要であるが、その蔵書数が限られている。実際には現代文学 (村上春樹を含む) をはじめとしてスペイン語訳された和書は増えているが、予算の関係上、対応できていないとのことである。

⑤ その他の問題点

語学能力の点からいえば、スペインの学生は英語の読解力が低いこと、フランス語についても旧世代と異なり、教育を受けていないなどの傾向がある。これが国際感覚という点

で影響を与えており、日本語教育では否定的に作用している。とくにマドリッドやバルセロナのように母集団が大きい都市と異なり、サラマンカ市とその周辺州から入学する学生が中心であるサラマンカ大学のような場合は、国際関係分野の教育・研究意識はけっして高くないという要因もある（ただし後述するナバラ州立大学の場合でもそうであるように、EU 統合後の国際戦略のなかで、大学・企業・研究機関の各レベルが東アジアとの関係を強化すべきであるという方針は、国家・州・大学においてかなり強く意識され、予算配分や学部再編などの方向で動きだしているようである）。

⑥ 国際交流と課題

サラマンカ大学は日本の 10 大学とのあいだで学生と教員との交流協定を結んでいる。これらはほとんどが外国語学部あるいはスペイン語学科をもつ私立大学である。ただし本年度より筑波大学が交流協定校となった。

交流形態は 1 年以内の短期留学、修士および博士などの学位習得をめざす長期留学、教員、研究員の交流である。（インタビューしたスペイン人学生は国学院大学での短期留学を経験し、同大学で単位も取得していた。）

日本の交流提携校に対する要望としては、短期留学生にはやや評価が甘くなる傾向があるので、日本語能力の集中的訓練を期待したいとのことである（日本の大学では、日本人教師による英語での授業だけでスペイン人学生に単位を与えてしまうケースなどもあるようである）。

また、日本研究に進学する学生を支援するためにも、日本政府レベルでの大学院留学のための奨学金を期待したいとのことであった。

⑦ 就職および進路

課程修了者の就職状況はかならずしも良好ではない。専門を生かしていない場合が多い。日本や米国でスペイン語教師をしている例もある。スペイン国内での研究機関、大学での教職などのポストがきわめてすくないことが背景にある。

他方、国内一般企業、日系企業への就職、翻訳通訳者になる道も限られている（これが同課程への進学希望者の少なさにつながっている）。

⑧ 大学院の開設

なお、2008 年秋の新学年からサラマンカ大学社会科学部に東アジア研究修士課程が開設される（定員 20 名）。これまでのコース（学部）は現在在籍している学生の 4 年進学と卒業を認めた上で廃止される。新課程のもとに、卒業生や他学部、他大学出身者があつまることを期待しているとのことである。

II ナバラ州立大学

大学概要

ナバラ州立大学はスペイン北部、フランスとの国境沿いの州であるナバラ州の州都・パンプローナ市に位置する。大学の歴史はまだ20年足らずととても若い。学生数は約一万人。学生の93パーセントはナバラ州の出身。経済・経営学部、農業工学学部・院、看護学部・院、産業・テレコミュニケーション学部・院、社会科学学部から構成される。ナバラ州は人口一人当たり面積がヨーロッパで最大といわれる利点も生かし、エコロジー・エネルギー産業がビジネスの中心である。500を超える企業・企業関連機関となんらかの提携を持っている同大学もその傾向が強いようである。なお隣接して州立大学よりやや規模の大きいナバラ大学もある。

なお以下のヒアリングはナバラ州立大学国際関係課チーフ・スサーナ・ヒント氏、社会科学部・イオスネ・ゴニ教授からおこなった。

国際交流と展望

ナバラ州立大学には日本関係科目はまだ設置されていない。EU統合後の準備期間を経て4年前から東アジアとの関係強化の方針が出され、エラスムス計画やISEP (International Student Exchange Program) などを利用した国際交流事業がはじまった。学生は他の欧米諸国やアジア諸国に留学している。アジアからの留学については、中国から数名の学生が現在、ナバラ州立大学に留学している。これは大学・研究機関・企業の3つのレベルで東アジア、とくに中国との経済的文化的関係の強化をもとめるという方針にもとづいている(これはEU全体の動向である)。

日本からの留学は、2003年に山口県立大学とのあいだで学術交流協定がむすばれ、現在も2名の日本人学生が留学中(留学期間は一年)である。これは同年に結ばれた山口県とナバラ州の姉妹提携に端を発する(ナバラ州出身のフランシスコ・サビエルが山口県にも滞在していたという歴史にちなむ。パンプローナ市内には1980年に山口市とのあいだで姉妹都市提携が結ばれた関係から「山口」の名を冠した公園もつくられている)。これらの留学生たちは大学の言語センターでスペイン語を学んでいる。県立大学とのあいだでは単位互換もおこなっている。山口県立大学は留学に力を入れている大学だが、もともとは英語圏志向が強かった学生もナバラ州立大学でのスペイン留学に充実感を得ているとのことであった。

また、イオスネ・ゴニ教授は交流提携にもとづいて山口県での短期留学を経験している。学術交流がはじまったばかりということもあり、日本人学生の受け入れもふくめて、交流の点ではインフォーマルな経験も重視している(逆にいえば、スペインー日本研究の制度的人的スタッフがまだ不在で、これをどうそろえるか模索しているということであろう)。

EU加盟以前のスペイン自体がけっして世界に開かれているとはいえなかったため、アジ

アとの学術交流の歴史は浅いが、現在は EU のもとでのプロジェクトを通して、またナバラ州のプロジェクトを通して、東アジアの各国各大学との国際交流を開始している。

日本との関係もまだ始まったばかりという感が強く、また日本国内の大学事情についての知識も十分ではないが、かなりオープンな姿勢であるとの印象を持った。(文責・友常勉)